

ストンバッグに入れて自宅に持ち帰り、洋服ダンスにしまったが、不安でならず、結局、事務所にとつて返し、ごみ箱にかくしました」と大幡がいえば、「私は若かったからもらった退職金で六カ月も飲み歩いた。しかし鈴木氏の麦粉部にいたおかげで、一生小麦畑一筋に過ごせた」と小倉。そこには生き生きとした表情で鈴木商店を語るOBの姿がみられる。

■若い者に仕事まかせた

柳田は言う。「鈴木は支店長、課長にも一流の人材がそろっていた。そこで商売を覚え、もまれたことが鈴木倒産後も役に立った。鈴木は私たちの心の故郷なんですよ」。

また「金子直吉に対する敬慕の念が辰巳会を支えている」と語るのには、金子の秘書を永く務めた萬座興産社長の田代義雄。

「入社三年目、弱冠二十五歳の高畑さんを世界の金融、貿易の中心地のロンドンに派遣、縦横無尽の活躍をさせたように、若

金子直吉の大実業家としての神髓は、彼自身が作成した事業方針に率直に表明されている。金子はいう。平素ヨリ如何ナル仕事ニテモ国家利益ニ反スルモノハ是ヲ為サズ、何事ヲ為スモ国家ノ利益ヲ眼目トシテ着手スルハ彼等の平生ナリトス。

それは典型的な国益志向型の経営理念だった。そこでは国家・社会の利益が優先され、利潤追求は副次的とされた。金子直吉は、典型的な共同社会中心の経営者であって、自己中心的企業者では決してなかった。金子の無欲恬(けんけん)淡、高潔な人格がそこにそれを清例(れつ)かつ濃厚なものにして

いる。経営理念は経営戦略を規定する。当時の緊急を要した国家目標

国益志向の経営

桂 芳男
神戸大学経済学部助教授



「産業自立」の達成に照応した国益志向の経営理念は、多角化志向の経営戦略を工業化の当初から自明のこととしていた。金子の経営戦略は、それが超多角化志向であったところに固有の特色があった。金子は総合商社の情報企業性を

能をフル活用して超多角化志向戦略を展開し、鈴木を巨大な工業化の組織者に仕立てたのであった。金子は野中兼山の殖産興業志向型の美学的儒教精神の継承者であった。金子はまた幸田露伴のいう

い者にどしどし仕事をまかせて、人材を育てた」。産業復興公団総裁を務めた長崎英造、衆議院副議長、厚相などを歴任した金光庸夫、帝国人造絹絲会長として活躍した久村清太、東京都副知事、呉造船社長を歴任した住田正一ら鈴木倒産後、多くの人材を輩出したのも金子の教育のたまものだろう。

■天下三分宣言書

帝人、神戸製鋼、日商岩井など鈴木系企業も親会社の破たんを乗り越えて発展している。「岩井産業との合併を決断したのは、金子さんがロンドンの高畑さんに書き送った『三井、三菱を圧倒する乎、然らざるも彼等と並んで天下を三分する乎、是鈴木商店全員の理想とする所也』という天下三分の宣言書を一日たりとも忘れたことがなかったからだ」。これは当時日商社長だった西川政一の述懐だが、鈴木系企業の活躍も金子に学んだ鈴木氏の積極果敢な事業精神をうまく取り入れていったからだろう。

柳田によると「総勢七百人余の辰巳会会員の平均年齢が七十七、八歳という高齢に達したことが最大の悩み」という。しかし高畑を亡くした辰巳会は太陽鋳工社長の鈴木を新会長として、「鈴木商店が果たした役割と金子に代表される鈴木氏の事業方針を正しく子々孫々まで伝えたい」とする会員すべての願いを果たして

こうとしている。(敬称略)
(53・10・24日経・つどう関西の経済人)

生涯、商社マン第一号の誇り

高畑誠一氏逝く

「チエアマンノ」私に発言する機会を与えて下さらないか」

四十九年、神戸商工会議所で開かれた経団連と地方会員との懇談会でこの九十歳近い老人が流ちょうな英語を操ってしゃべり出した。他会員の現状報告を聞いていた土光会長もしばらくきよとん。

その老人は十九日逝(い)った高畑誠一氏。英国仕立ての紳士ぶりと、海外での商社マン第一号として生涯、誇りをきよと示した人物。

“三國間貿易”編み出す 英国仕立ての紳士、ゴルフ紹介

鈴木商店を支え焼き打ち―倒産とドラマチックな大正、昭和初期の神戸経済史を彩った主役としてあまりにも神戸になじみが深い。

明治四十二年、出光佐三(出光石油)永井幸太郎(元日商社長)両氏とともに、神戸高商を卒業、水島鉄也校長のすすめに従って鈴木入りした。そのころの鈴木は金子直吉氏が健在。砂糖、樟(しょう)腦のほか、神戸製鋼を買収するなど拡大の一端をたどっていたさ中、英語に強く、経済に明るい高畑氏を重用し、早速世界経済の中心であるロンドン支店長として送り込んだ。

ロンドンでのビジネスマンといえば三井、横浜正金など数人。その中に割って入った弱冠二十七歳の高畑氏は、ロスチャイル

ドなどユダヤ系会社や商社から抜け目なく情報を収集し、的確に本店に打電した。

「貿易は情報」が口グセの金子氏の思惑どおり、やがて世界第一次大戦がぼつ発。鉄、小豆、砂糖は日に日に暴騰を続けた。鉄はわずか半年で二倍という高値。

「手あたり次第に買いまくれ」という金子氏はこの時「日本海々戦に於ける東郷大将が彼の皇国の興廢この一戦に在り」ではじまる有名な天下三分の書を送っている。三井、三菱を追い越せというすさまじい金子氏の覇気は先兵としての高畑氏の情報ですべてであったことはいうまでもない。また三國間貿易という新機軸を編み出したのも高畑氏。それがズバリ当たって、焼き打ち(大正七年)後、長駆した鈴木は、貿易面でライバルの三井を追い抜いた。

その鈴木は後に倒産するのだが、高畑、永井コンビでみごとに再生、今日の日商岩井の基礎を築いた。その因は高畑氏の合

理に永井氏の内政がうまくかみ合ったためといわれている。また日本に最初にゴルフを紹介し、ルールブックをほん訳したのも高畑氏。昭和七年広野ゴルフ場設立に奔走し、発起人代表となった。

古きよき大正、昭和期を、合理、覇気、スマートという商社マンらしきで多彩に貫いた人だが、先の小野三郎氏(元帝人製機社長)に続いて、鈴木氏のドラマチックな証言者がまた一人逝った。(53・9・2・神戸新聞)